190304　　もう迷惑はかけられない　　小野朋士

昨年のいつ頃であったか、福島くん(15 回卒)から三月の２日・３日を予定しておいてくれといわれていた。１月になって書き込んだ予定表には明らかにこの日に「キングサーモン」と福島くんのペンションの名前が書き込んである。だが今年になってからは何の連絡もないまま２月も下旬になると、私が間違えて予定表に書き込んだのではないだろうかと心配になってきた。3 月の第１日曜日という行動日の設定は福島くんたちの苦肉の策だろうと思っていた。ここ数年の暖冬傾向で雪が消えるのが早まっているので、純白の雪の原を歩くためには２月のほうがいいだろう。だが２月という時期は、山の上では雪の降らない日は一日たりともありえないという話もよく聞く。天候の安定と残雪の多さ、この両者が実現される可能性が高い時期として考え抜かれた３月２日だろう。そう思いながら予定表に書き込んだ記憶があった。登山靴に油を塗ったり防寒具を並べてみたりしながらも、脳軟化気味の私の頭脳の実態を考え合わせて心配が募ってきた。木曜日になって西村くん(15 回卒)に電話をして確かめた。土曜日の午後、波田の太田くん（14 回卒）と一緒に迎えに来てくれると言う。そこでやっと並べてあった山の道具をサブザックに詰め込む気になった。

3 月 2 日午後 3 時ころ西村・太田の二人が来てくれた。太田くんと雪の山を一緒に歩いたのは 3 年ほど前だっただろうか。西村くんは昨年の夏、私が信大病院に入院していたとき見舞いに来てくれて元気な話を聞かせてもらっている。30 分ほどの間いろいろな消息を教えてもらった。出掛ける時に庭に咲く節分草を見てもらう。セツブンソウは私の父が植えてあったものを、マイワイフが大切にして育てたので無闇に増えて今では庭の一角を占拠するようになっている。雪が残っている時期から健気に咲くこの花は、春の遅い信州にピッタリである。時々写真を撮らせてくれと訪れる人がいる。

雪の上を歩くのを楽しみにして霧ヶ峰・姫木平のキング・サーモンを訪れようとしているのであるが、本当に雪はあるのだろうか。今年の 2 月は気温が平年比 2℃くらい高く、降水量は平年の 2%とか 4%とか言っているらしい。勝弦峠では陽当りの悪い道端に汚れた雪が少し残っていた。和田峠を越えると日陰の山肌に雪が見えるようになった。国道から鷹山への道に入ると山肌の雪は増え、道路の除雪で押しやられた雪がガードレールに押し付けられて残っている。だが、自動車が雪や氷の上を走る機会はなかった。その機会は姫木平のペンション村に入ってから短い区間で経験できただけである。雪や氷が少ない代わりに狐に出会ったし、キング・サーモンの近くでは鹿四頭がゆっくりした姿勢で私達の車を眺めていた。雪が少なくて温かい今年の気候は、彼らの生活にどんな影響を与えることになるだろうか。家にいたときは野菜を食い荒らす害虫が増えるのではないかと心配していたが、ここに来たらニッコウキスゲを食い荒らす鹿の頭数(ｱﾀﾏｶｽﾞ)が気にかかる。

キング・サーモンに到着したら亀井さん(15 回卒)も連れてきた犬を車から下ろしているところであった。

玄関には福島くんと奥さんが出迎えてくれた。二人とも元気そうであったが、福島くんご本人は体調がいいとは言えないことを会が始まった後すぐに聞かされてしまった。降旗く

ん(15 回卒)はスキー場から今帰ったところらしく私達を待っていてくれた。
今回の山歩きには福島くんが久しぶりに一緒に歩けるだろうと言っていた。今年になってからの電話で聞いたような気がする。だがここに来て腰を痛めてしまったそうだ。長時間はとても歩けそうにないと言う。先ほど見せた元気そうな顔は空元気だったのかもしれない。その上 5 月になってから入院が予定されているらしい。心配である。
宴会はご近所に住み、現職の長和町町議をしておられる 60 歳台の人を交えて七人で始まった。少し遅れて佐藤さんが参加。佐藤さんは槍ヶ岳の小屋にいて、私が福島・西村くんに連れられて槍ヶ岳に登ったとき大変世話になった方。そしてここ数年は、私達の雪山歩きのガイドを務めていただいている。そしてもうひとり、福島くんの若いスキー仲間の人。合計 9 人になった。賑やかに談論風発。相変わらず西村くんが元気である。彼の専門のトンネル関係の話では当然彼の独壇場。社会の流れの話になっても彼の話は特有の説得性がある。山登り関係では現役で国の内外の山に登っているので話題には事欠かない。
話が 15 回卒生の同年輩の諸君の消息になる。年ごとに残念な話が多くなるのは仕方がないことかもしれない。いくら長寿時代とはいえ 70 歳を過ぎれば体の不調が出てきても不思議ではないだろう。然し、ごく最近まで皆の先頭に立って活躍していた人が、と聞くとやはり寂しくなる。この諸君は、私にとっては教え子である。年齢による秩序というものを無視して私より先にこの世からいなくなるということは許されない、あってはいけないことである。最大限に体をいたわって、秩序維持に協力してもらいたいものだ。
私は 9 時で眠らせてもらうことにした。近頃は、いくら眠ってもいつも目がショボショボしていて目を閉じていたくなる。無理をして起きていると、ろくなことが起きないという自覚もあるのだ。

3 月 3 日、日曜日。今日は雨に降られることを覚悟しなければいけないらしい。いや、山の上だから雨ではなくて雪になってくれるだろう。
目的地はどこにするか。福島くんが情報を集めていてくれた。「北八ヶ岳ロープウェイ」で登って坪庭や縞枯山・雨池など現地で判断をしようという。ここだったら雪が十分にあるらしい。
8 時 10 分、西村くんの車に太田くんと私、佐藤さんの車に亀井さんの五人で出発。今にも降り出しそうな雲行きである。山麓駅の駐車場は 600 台収容らしいが、私の予想を上回る数の車が並んでいる。ここのロープウエイは 10 分ごとに満員の客(定員 100 人)を乗せて働いている。標高 1771mH から 2237mH までを 7 分で運び上げてくれる。料金は往復で 1,900 円。だがほとんどの人は登りのみ 1,000 円、それも一日券らしい。もちろん下りはスキーでビュウと下る。だから登りはぎゅうぎゅう詰めの満員でも下りのゴンドラは雪の原を一目見たいというお年寄りたちだけでゆっくり。
ゴンドラを降りた私達はとりあえず縞枯山荘まで行って雪の様子を見ようということになった。
縞枯山と坪庭に挟まれた谷状ではあるが平坦な道を、山荘を目指した。上り下りが少ない道をのんびりと歩く。路は完全に雪で埋まっているが大勢の人が歩いているので雪が固ま

っていて歩きやすい。スキーの跡も多いが、行き交う人達は半数がスノウシュウ、半数がアイゼンだろうか。私達はスノウシュウを履かずに気楽に歩く

路の左側を少し登れば坪庭の平が広がっているはずである。右側には縞枯山(2403mH)。その麓にはシラビソの林が広がっている。樹氷が出来るのは少し暖かすぎるのだろう。枝には雪がつもり、ツララを沢山ぶら下げている。枯れた樹もチラホラ目につく。枯樹が帯状に分布したものが縞枯れ現象である。だがその原因はまだはっきりしていないようだ。数年前に雨池に連れて行ってもらった時の記録に、縞枯れの原因としてシラビソの木の「寂しがり屋」気質を書いておいたような気がする。シラビソは一本の独立樹としては成長できない。数百本が一斉に芽を出し、それが互いに助け合って強い風や強い日光から身を守り合いながら成長する。その過程で弱い木が枯れても周りの木が枝を伸ばし合って環境を和らげ合いながら成長をする。ところが、仲間のうちのお山の大将が不慮の事故とか、人間どもの悪さとかによって枯れると大変である。周りの木は急に強い太陽光や風に身を曝すことになる。環境の激変に耐えられずに枯れる。そして当然この現象は蔓延していく。シラビソの林の中に生えている一本の大きな白樺の木が枯れたときも、それをきっかけにして周りのシラビソが枯れることもあるだろう。これが私の縞枯れ理論である。だがこの赤ちゃん絵本のテーマになりそうなお話には賛同者がいない。肝心の縞枯れが一定幅の帯状にできて、その帯がある程度の速さで山の高い方に移動することも説明不可能である。賛同者がいないのも無理がない

縞枯山荘に着いた。山荘の前に大きな風車が回って電気を作っているらしい。諏訪地方は長野県の中では西風が吹きやすいらしい。その上この山荘が位置する場所は東西に直線状に作られた浅い溝の真中にある。風力発電の適地だろう。

山荘の入り口の少し離れたところにプラスチックの鎖が張り渡してある。営業休止かなと思わせたが「営業中」と書いた札が玄関口に掲げてある。福島くんからは縞枯山荘は営業をしていると聞いてきた。西村くんが玄関の戸を明けて中をうかがった。そして営業をしていることを確認した。帰り道にこの小屋でコーヒーを頂く頃になってやっと気がついた。鎖と玄関の間の１ｍほどはアイゼンやスノウシュウを脱ぎ、靴の雪を小屋に持ち込まないように払うための空間らしい。

私達は山荘(2240mH)には入らずにこれからどこを歩くかを話し合った。二案ある。一つはこのまま進んで雨池(2067mH)まで往復する。もう一つはここから右側の縞枯山(2403mH)に登ってくる。どちらのコースも高低差はあまり違わないようだ。急速に体力が失われつつある私としては楽なのはどちらかと考えざるを得ない。雨池コースは目的地は面白そうであるが体力がなくなる後半の時間帯に苦しい登りが控えている。縞枯れコースはまだ体力があるうちに登りきれば後半の下りは滑り降りればすむかもしれない。年寄りの主張に皆がやむを得ないと納得してくれた。

シラビソの林の中を 10 分ほど登った。雪は十分にあるが踏み固められている。スノウシュウはつけないまま登っていた。そんなとき西村くんが「俺はここまでだ。小屋で待っている」と言い出した。

実は西村くんはアキレス腱近くの筋肉を痛めていたのだ。このことは昨日行き会ったとき

から聞かされていた。本来なら足を休ませて回復を図っていなければいけない時期らしい。だが福島くんが歩けない以上頑張らざるを得ないと 5 人の先頭に立って歩いてくれていたのだと思う。しきりに 4 月・5 月の山行の予定を気にかけていた。5 月には槍ヶ岳に登る十数年の慣例が守れるかも心配だとも言っていた。山荘に戻ってもらうことにした。西村くんがいなくても佐藤さんが居るから心配はない。そう思って先に進みだしたが、登山道は巻道ではなく強い勾配でまっすぐ頂上に向かっている。路は凍っているわけではないが踏み固められた雪はアイゼンの領域であることを示している。今度は私がネをあげてしまった。元気な三人には申し訳ないが西村くんの後を追わせてくれと言わざるを得なかった。

太田くん亀井さん佐藤さんの三人も私に同調してくれることになった。

縞枯山荘では小屋の人二人を相手に西村くんがコーヒーを飲んでいた。コーヒー・甘酒が 400 円。大きなストーブに太いマキが暖かく燃えていた。泊り客らしいグループも出入りしていた。私達と同じように休憩だけするための客も数人。

このままではあまりにもだらしない。坪庭を歩いてから帰ろうということになった。山頂駅に行く途中から坪庭に登る道がある。登り始めたが私達には表面が凍った雪道は無理であった。山頂駅まで戻って坪庭への本道を使うことにした。ここも登りはじめの 10m くらいは凍っていたが道脇の柵にしがみついて登りきった。しばらく前から雪が舞いだしていた。何も見えない原っぱをしばらく歩いて引き返した。

山麓駅のレストランで昼食。太田・小野は西村くんの車で帰宅。亀井・佐藤は一旦キングサーモンへ。

西村くんの足が心配である。痛む脚を無理させておきながらこのセリフはないかもしれないが、十分な治療と休養をとって今までと同じ超人的な山行を続けてもらいたいものだ。さらに、福島くんだ。フクとキングサーモンの存在は大勢の人にかけがえのない大切なものを与え続けてきた。ぜひ今まで同様に集まりの拠点を守り続けてもらいたい。そして仲間を山歩きに誘い、一緒に歩く体調と体力を取り戻してほしいと願う。

主に 15 回卒の山岳部の諸君に助けられながら年に二回ほどの山行をさせてもらって 20 年近くがたった。私がこの年まで比較的元気でいられたのはキングサーモンでの集まりのおかげである。人付き合いの悪い私である。田舎に住んでいると毎日部屋に閉じこもって、誰とも話し合うこともなく過ごしてしまう。何の刺激もない日々は老化促進剤になるだけだろう。三月になれば刺激いっぱいの宴会に同席させてもらえる。美しい雪の原っぱで新鮮な空気を胸いっぱいに吸い込むことができる。こう考えることは何よりの老化阻害剤であった。だがいくら阻害されていても老化の進行は着実な歩みを続けている。これ以上甘えていることは許されないだろう。これからは、山歩きは敬遠し、そのかわりの他の機会に老化阻害剤を与えていただきたいものである。